

## 忘れられぬ人々の思い出 (2008年)

若くして命を落とすニュースに出会う度に、胸が締め付けられる。『異星人伝説』を翻訳出版して間もなく、米原万里さんが早速、「週刊文春」に書評を書いてくださった。当時の在京ハンガリー大使のセルダヘイ氏が、ピーター・フランクや吉川弘之学術会議会長を招いて大使館で出版記念会を開いてくれるというので、米原さんに招待メールを送った。米原さんをよく知る佐藤経明先生からのアドヴァイスだった。快く出席していただけるものと思っていたら、「そういうつもりで書評を書いているではありませんから、お気遣いなく」というそっけない返事がきた。佐藤先生には、「それも一つの見識だと思うので、これ以上誘うのは止めます」と彼女の返答を伝えた。その米原さんが癌を患っていることを佐藤先生から聞いていたが、それから4年もしないうちにお亡くなりになった。作家としてこれから長く活躍できる才女だったのに、残念至極としか言いようがない。

『異星人伝説』の著者であるマルクス・ジョルジュ教授とも懇意にさせてもらった。ハンガリーを代表する原子物理学者で、かつ国際的に知られた物理学教育の推進者である。ハンガリー科学アカデミーで開いた日本語版出版記念会も、多くの学者を集めて盛大に行ったが、マルクス教授はすでに癌に冒されていて、何とか日本語出版が間に合った。しかし、邦訳の2刷がでた時にはもうお渡しすることができなかった。多くの人々に惜しまれ、ファルカシュ墓地で盛大な葬儀が営まれた。

2008年9月初め、インターネットのニュースを見て仰天した。草柳文恵さんが自殺したという。それも高層マンションのベランダから首を吊ったというのである。そういえば最近メディアで見かけないとは思っていた。婦人病(子宮)系の疾病で苦しんでいたようだが、発作的な自殺は薬の所為ではないだろうか。

北海道テレビの東欧取材で文恵さんがハンガリーを訪れたのは1989年11月初め。もう記憶が確かではないが、何かの伝で日本の制作会社から私に電話がかかってきて、取材のアテンドを頼むということだった。勝手にアテンドする訳にはいかないから、外務省の便宜供与を申請するように指示した。文恵さんは故草柳大蔵氏の長女で、青山学院の学生時代にミス東京に選ばれた才媛である。どれほどの才女なのか興味があった。ところが、ハンガリーに到着した翌日、彼女は腰痛で動けなくなった。もしかしたら、婦人病がすでにこの時に発症していたのかもしれない。とりあえずテレビクルーは街の取材に出掛け、私は彼女をレーザー光線による針治療に連れて行くことになった。私もテニス肘やら痛風、持病の腰痛でいろいろ温泉治療を試しているところだったので、テルマルホテルで知り合った整形外科医の家まで連れて行った。治療を終え、TBSラジオの定時番組へ電話参加するために大使館に戻った。ハンガリーの報告をしなければならぬというが、一日中、バタバタしていて何も準備できていない。私が急いでテキストをまとめ、彼女はそれを復唱して生番組に備えた。放送を無事終えて、ついでに次週にワルシャワから放送する分のテキストも作成した。

原因不明の腰痛は翌日には嘘のように治った。大事をとって、その日も仕事を休み、テルマルホテルの温泉へ連れて行った。クルーは主役なしでハンガリー国境の撮影を終え、それから私のフラットに集合して、皆で夕食をとりながら「生オケ」パーティになった。古びたグランドピアノを借りていたので、歌謡曲や演歌などを弾いて盛り上がった。文恵さんは、「それでは私も一曲」とショパンを弾いてくれた記憶がある。最後の夜はオペラを見たいというので、「ボエーム」のチケットを手配し同行した。クルーはオペラではなく、キャバレーへ流れたと記憶している。

数日の短い期間だったが、楽しい時間を過ごさせてもらった。「ミス東京」や「棋士との結婚」の話題は、週刊誌などで読んだ覚えがあった。「将棋指しと結婚したんですね」という不躰な質問にも、「あー、真部さん？もう別れたのよ」という調子で会話が弾んだ。快活ではっきりした口調の物言いは今でも耳に残っている。その後、何度か電話で話をしたり、手紙をいただいたりした。見事な達筆であった。私は専門調査員の仕事を終えた後、しばらくして大学を辞めて、ハンガリーに舞い戻ったので、連絡が途絶えてしまった。私が知っているあの文恵さんが自殺なんかするわけではないと思う。骨太で大柄な彼女の体が、骨と皮だけになっていたという記事も読んだ。闘病生活が苦しかったのか、人生が終わったと考えたのか。それにしても、あのような発作的な行為は薬の所為ではなのか。年老いて娘に先立たれた母上の心情を察すると、言葉もない。

父母や年長の友人・知人が次々に世を去っていくだけでなく、私よりも若い才女たちも急ぐように去っていく。これから追悼のことばを認める機会が増えていくことだけは間違いない。合掌。